

《解題》

クヅネツオフ博士の論文について

真柄 欽次

イルクーツク大学歴史学部長クヅネツオフ博士は平成13年11月2日に島根県立大学、交流センターで「シベリア、極東ロシアにおける資源開発と北東アジアにおける政治、経済協力」について講演された。本論分「Oil and Gas Resources of Siberia and Russian Far East, Their Role in Forming the System of the Political and Economic Cooperation in North East Asia Region」は博士の講演原稿に加筆されたものである¹⁾。

第二次大戦後の日本人兵士のシベリア抑留についての、旧ソビエト連邦の史実に基づく論文などを含め、前世紀の日露関係について多くの業績を残されている著名な博士が、ご自身の専門から離れた「石油、天然ガス政策」について纏められた論文であり、博士の絶大な努力に対して、敬意を表したいと思う。教育と研究の両面でイルクーツク大学との交流を一層進めたいと考えている島根県立大学にとって、博士の存在は重要であり、その思いが通じた結果の御著作と言えるかも知れない。

本論文に述べられている通り、ロシアの石油、天然ガス資源の中心は西シベリア、ウラル～ボルガ、西コーカサス盆地（図1）であり、長距離パイプラインが必要となる。中近東諸国での生産が石油中心であるのに反して、ロシアには膨大な天然ガス鉱床が存在する。地球温暖化や地域環境保全を考えるに当たって、天然ガスが最もクリーンな化石燃料であることも知られている。また、今世紀中に実現が期待される、環境に最もやさしい「水素エネルギー時代」への架け橋としても、天然ガスの重要性は無視できない。近い将来、天然ガスによる燃料電池発電システムを構築できれば、そのインフラの大部分は究極的に「水素エネルギー時代」においても、有効に使用できる可能性がある。その為にはまず第一に国際的な、第二に国内におけるパイプライン網の建設が必要となるであろう。

エクソン、シェル、マラソンなどの国際石油資本と三井、三菱などの日本企業との合弁によるサハリン沖（図1）鉱床の開発と天然ガス輸入が2004～2005年をめどに進行している事は喜ばしいが、ロシア、サイエンスアカデミーのボリスサニーフ(Boris Saneev)氏が指摘する通り、シベリア地区から日本への天然ガス輸送については、1994年以来、ロシア側の熱心さに比べて、日本側は地震探査の情報を収集すること以外、あまり活動していない（本論文 4.(2)）。1990年代以降の日本経済の停滞、並びにロシアの国内体制の不備（本論文 5）があるとは言え、長期的な視野に基づく計画の策定が望まれる。ペースは遅いものの、ロシア経済は確実に市場経済化しており、プーチン政権の外国資本導入と国内資源開発に対する積極的な政策もあるので、現状の打破が期待される。これらの点において、クヅネツオフ博士の論文は多くを示唆するものであって、構造改革の真只中、石油公

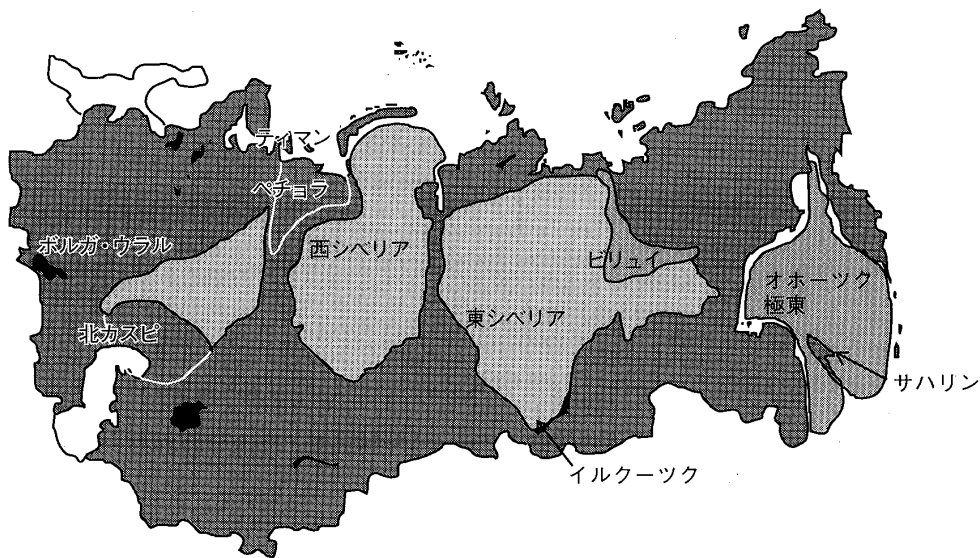


図1 ロシアにおける主要な堆積盆地
出所 注2) の図1を修正

団廃止が論じられている現状があるとは言うものの、今世紀の我が国のエネルギー、環境政策にとって重要な提言であると考ええる。

注

- 1) グズネツォフ博士が島根県立大学において短期滞在研究をすすめられるにあたっては、今岡日出紀学部長及び小林博教授が、助言・サポートされた。その意味で本論文はイルクーツク大学との今後の共同研究をめざす第一歩をしるしたものともいえよう。
- 2) 手塚登、1997、最近のロシアの石油事情、石油技術協会誌、第62巻 第2号、122-132頁。